

機関番号：10102
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2010
 課題番号：21730683
 研究課題名（和文）オーセンティック・アセスメント理論に基づく社会系教科の評価実践開発の研究
 研究課題名（英文）a study of assessment theories based on authentic assessment.

研究代表者
 藤本 将人 (FUJIMOTO MASATO)
 北海道教育大学・教育学部・講師
 研究者番号：10404229

研究成果の概要（和文）：本研究では、「オーセンティック・アセスメント」と呼ばれる評価理論を社会科（市民性育成教育）に対応させ、わが国の教育現場で利用可能な目標準拠評価の体系的理論と分析ツールを示すことが目的であった。本研究では、オーセンティック・アセスメントによる評価の方法を明らかにしたこと、また社会科授業において、それらの方法が応用可能であることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The aims of this study are making assessment theory and making assessment tools of evaluating student learning outcomes through making authentic assessment theory's view. This study applies it to Japanese social studies classes.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：評価

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内の研究動向

日本の社会科教育における評価実践を取り巻く現状は、以下の通りであった。

- ①2001年4月、戦後直後から採用された「相対評価」を否定して、「目標に準拠した評価（いわゆる絶対評価）」を全面的に採用するように、公的文書により、評価に関する方針転換が通知された。
- ②この公的文書による方針の転換は、教育現場の評価実践に甚大な影響を及ぼしているが、現場教員から具体的授業に対応させ

た評価の方法が確立できていないという実践する上での根本的な課題が提出されていた。

- ③特に、評価情報を分析する方法、また分析結果を授業・学習者にフィードバックする方法が理論的に提供されていないという意見が教育関係諸学会で提出されていた。

(2) 本研究の位置づけ

教育現場から寄せられた実践上の課題を解決するためには、授業構成と評価方法を一体化して考察し、授業における学習者

の認識結果を確定・査定する評価理論の提供が必要となっていた。これまでわが国の社会科教育関係諸学会においても、その必要性が強く唱えられてきたものの、体系的かつ具体的な提案を施した主張は皆無であった。よって本研究では、評価実践に対する体系的かつ具体的な提案を行うことを目指した。

(3) 国外の研究動向

海外における社会科のオーセンティック・アセスメントの研究では、Fred M. Newmann (University of Wisconsin) が教育哲学的研究を主に行っていた。ここでは、デューイを起源とするプラグマティズムの教育理論として分析・紹介されていた。

(4) 本研究の位置づけ

海外における先行研究は、一般教育学的な理念的紹介でとどまっていることが特徴であった。これらは「研究のための研究」となっており、実際の教育現場が利用可能な情報を提供するには到っていないことが明らかであったため、本研究では、わが国の現実の教育現場で実践可能な形で具体的な提案を行うことが必要であると考えている。

2. 研究の目的

そこで本研究では、アメリカ市民性教育（初等教育、中等教育、高等教育）におけるオーセンティック・アセスメントの評価実践について、「教科書及び関連教材における記述内容」「授業実践内容」「学習者の認識変容分析」の三つの観点から調査を行った上で、「3. 研究の方法」に示すような点を明確にすることを目的とした。なお、アメリカを調査対象とするのは、オーセンティック・アセスメントと呼ばれる最新の評価理論が生まれた土地がアメリカだからであり、評価に関する議論もアメリカで最も活発に行われていたからである。研究の手続きは、以下の通りである。

3. 研究の方法

- (1) オーセンティック・アセスメントにおける授業の目標はどのように構成されているのか。（目標構造の抽出）
- (2) その目標を達成するために、どのような授業が組まれているのか。（授業構成理論の抽出）
- (3) その授業では、学習成果の評価の仕組みがどのように組み込まれているのか。（評価手法の分析）
- (4) 評価の結果得られた情報は、具体的にどの

ように分析されているのか。またその分析ツールはどのように開発されているのか。（情報の分析手法の検討）

- (5) 評価情報は授業や学習者の学びにどのようにフィードバックされているのか。（情報の利用方法の検討）
- (6) (1)→(2)→(3)→(4)→(5)という研究手続きをとることで、評価実践に内在されている評価原理を明らかにする。また複数の事例を同じ研究方法論で分析することにより、評価原理の類型化を行う。

4. 研究成果

〔研究成果〕

(1) 上記の手続きで研究を進めた結果、オーセンティック・アセスメントの方法論が明らかになった。また、明らかとなった方法論は、日本の社会科授業にも応用可能であることが明らかとなった。

研究過程で明らかとなったオーセンティック・アセスメントの方法論については、各種学会で報告することができ、批判を仰ぐことができた。

具体的には、以下の通りである。

① 藤本将人「オーセンティック概念に基づく社会科学習成果測定論」全国社会科教育学会第 58 回全国研究大会、於：弘前大学、2009 年 10 月。

② 藤本将人「日本の社会科評価研究の方法論」全国社会科教育学会主催「社会科教育研究の方法論の国際化プロジェクト」シンポジウム、於：東京 CIC、2010 年 5 月。

③ 藤本将人「目標準拠評価を実践するためのフレームワークの開発－評価主導の学習指導を実現するために－」社会系教科教育学会第 22 回研究発表大会、於：兵庫教育大学、2011 年 2 月。

(2) また発表により鍛えられた社会科評価原理をもとに、日本の社会科授業を開発することもできた。

具体的には、以下の通りである。

① 細川遼太・藤本将人「多文化世界を捉えさせる授業－社会科単元「言語景観から読み解く都市」の開発」北海道教育大学『北海道教育大学紀要 教育科学編』2011 年 2 月、Vol. 61, pp. 193-205.

② 小林一博・村瀬清史・池田泰弘・藤本将人「市民性の育成を保障する社会科授業の開発－「社会化」を踏まえた「対抗社会化」

による社会科一」北海道教育大学『北海道教育大学紀要 教育科学編』2011年2月, Vol. 61, pp. 207-218.

(3)上記の研究成果は、現代アメリカ社会科教育の潮流から日本の社会科教育のあり方を考察した結果である。それらの研究から見えてきたことは、50分間の授業における学習成果を評価対象とする評価理論の存在とその具体的な評価実践の姿であった。本研究においては、まず、理論を実践可能な形で精緻化できたこと。次に、日本において実際に実践事例を作り出すことができたことを成果として挙げることができるだろう。

実際に、開発した授業及び評価については、北海道教育大学附属釧路中学校で実践し、その有効性を確認するに至っている(理論構築は藤本が担当。実践による検証は、小林一博主幹教諭が担当。実践期間は2011年2月7日～9日。中学校1年生を対象に実施。)

また本研究では、評価を中心とした教育原理を解明し、実際の教育現場で使用可能な分析ツールを開発できたところに特色と独創性がある。本研究は、わが国で活用可能な目標標準評価の実践方法をモデル化して示し、指導と評価の一体化した授業を構築するための極めて重要な研究となりえたと考えている。

これまでのわが国の社会科教育研究は、目標論、内容論、方法論に特化した上で授業実践に内包された個々の原理を抽出する研究が主であったため、評価の視点を主体にした研究を組織できたことは大きな成果である。

[今後の研究課題]

(4)これらの成果は、今後の日本の社会科評価研究に生かされることになるが、残された課題も多くあることが明らかになった。

①評価の研究方法論研究が必要であること。

日本の社会科評価研究は、その蓄積の少なから、研究方法論のバリエーションが少ない現状が明らかとなった。哲学的な思想研究も評価に関しては成熟していないため、開発研究に取り掛かるうにもそのアイデアの源泉がない状態である。今後の研究で他国の実践を分析する原理研究が必要となるう。

②海外の社会科評価実践の収集・分析が必要であること。

原理研究を行うに値する社会科評価実践の収集を行う必要がある。本研究で実施したアメリカ合衆国以外にも市民性(社会科)教育を行っている国はある。同じ民主主義国家であるイギリスやオーストラリア、カナダなども視野に入れながら教育の事実を収集・分

析することが必要となるう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計3件)

①細川遼太・藤本将人「多文化世界を捉えさせる授業—社会科単元「言語景観から読み解く都市」の開発」北海道教育大学『北海道教育大学紀要 教育科学編』, 2011年2月, 査読無, Vol. 61, pp. 193-205.

②小林一博・村瀬清史・池田泰弘・藤本将人「市民性の育成を保障する社会科授業の開発—「社会化」を踏まえた「対抗社会化」による社会科一」北海道教育大学『北海道教育大学紀要 教育科学編』, 2011年2月, 査読無, Vol. 61, pp. 207-218.

③細川遼太・藤本将人「歴史教育における授業開発方法論研究—資料(史料)の扱い方に関する民主主義的検討—」北海道教育大学釧路校『北海道教育大学釧路校研究紀要』2010年12月, 査読無, Vol. 42, pp. 89-97.

[学会発表](計12件)

①藤本将人「新しい教科書の見方・使い方」根室管内社会科教育研究会, 於: 中標津町立中標津中学校, 2011年2月5日.

②藤本将人「目標標準評価を実践するためのフレームワークの開発—評価主導の学習指導を実現するために—」社会系教科教育学会第22回研究発表大会, 於: 兵庫教育大学, 2011年2月20日.

③藤本将人「社会科新内容の取扱いについて—新旧教科書の構造比較—」平成22年度釧路地方社会科教育研究会冬季研修会, 於: アクアベール, 2011年1月22日.

④藤本将人「社会科における不易と流行」根室管内社会科教育研究会, 於: 北海道教育大学釧路校, 2010年12月28日.

⑤藤本将人「目標標準評価を実践するためのツールの開発—大学講義(中学校社会科教育法)を事例に—」教育目標評価学会第21回大会全国研究大会, 於: 共愛前橋国際大学, 2010年12月12日.

⑥藤本将人「アメリカにおける構成主義を基盤とする社会科教科論—社会を創造する資質の育成—」全国社会科教育学会第59回全国研究大会, 於: 同志社大学, 2010年10月31日.

- ⑦藤本将人「社会科教科書の見方・使い方・視点」根室管内社会科教育研究会，於：中標津町立中標津中学校，2010年8月28日。
- ⑧藤本将人「社会科における不易と流行」平成22年度後志社会科研究協議会，於：水明閣，2010年8月5日。
- ⑨藤本将人「日本の社会科評価研究の方法論」全国社会科教育学会主催「社会科教育研究の方法論の国際化プロジェクト」シンポジウム，於：東京CIC，2010年5月30日。
- ⑩藤本将人「社会科授業の類型」根室管内社会科教育研究会，於：中標津町立中標津中学校，2010年2月6日。
- ⑪藤本将人「オーセンティック概念に基づく社会科学習成果測定論」全国社会科教育学会第58回全国研究大会，於：弘前大学，2009年10月11日。
- ⑫藤本将人「世界の社会科ー日本の社会科を相対化するためにー」平成21年度後志社会科研究協議会，於：北海道倶知安町，2009年8月4日。

〔図書〕（計3件）

- ①藤本将人「全国学テ「国語」「算数」から類推する社会科良問の条件」『社会科教育12月号』明治図書，2010年12月，p.13.
- ②藤本将人「社会科教育の評価」社会認識教育学会編『中学校社会科教育』学術図書出版社，2010年9月，pp.165-175.
- ③藤本将人「小学校社会科の評価技法」原田智仁編著『社会科教育のフロンティアー生きぬく知恵を育むー』保育出版社，2010年2月，pp.163-168.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 将人 (FUJIMOTO MASATO)
北海道教育大学・教育学部・講師
研究者番号：10404229

(2) 研究協力者

小林一博 (KOBAYASHI KAZUHIRO)
北海道教育大学附属釧路中学校・主幹教諭
村瀬清史 (MURASE KIYOHUMI)

北海道教育大学附属釧路中学校・教諭
笥豊 (KAKEI YUTAKA)
北海道教育大学附属釧路小学校・教諭